



Title	The Preoperative Pad Test as a Predictor of Urinary Incontinence and Quality of Life after Robot-assisted Radical Prostatectomy: A Prospective, Observational, Clinocal Study(内容・審査結果要旨)
Author(s)	栗村, 嘉昌
Citation	
Issue Date	2021-03-25
URL	<a href="http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1386">http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1386</a>
Rights	
DOI	
Text Version	none

This document is downloaded at: 2021-11-05T05:08:24Z

## 論文内容要旨 (和文)

学位論文題名	<b>Incontinence and Quality of Life after Robot-assisted Radical Prostatectomy: A Prospective, Observational, Clinical Study</b>
<p>限局性前立腺癌に対する外科治療としては一般的に前立腺全摘除術が広く行われている。前立腺全摘除術の合併症としては尿失禁が最多であるが、これは QOL を大きく低下させることが知られている。ロボット支援前立腺全摘除術 (RARP) は、3D 映像による高い視認性と精密な手術操作により術中の組織損傷を軽減し、術後の尿失禁の発生率を減少に寄与するが、いまだに術後の尿失禁は多く見られる。これは、手術手技のみならず、患者側の因子も影響するためではないかと推察される。従来、尿失禁は術後から評価されるのが一般的で、術前から評価されることはなかった。しかし、術前から尿失禁を有する症例は存在しており、それが術後の尿失禁とどのように関連するかは明らかになっていない。そこで今回、RARP を施行した 329 症例を対象に、術前の尿失禁が、術後の尿失禁を含む下部尿路機能と QOL に及ぼす影響について研究を行った。尿失禁の評価は 1 時間パッドテストにて行った。パッドを装着した状態で 1 時間運動を行ってもらい、運動の前後でパッド重量が 2g 以上増加した場合、尿失禁ありと定義した。その結果、139 症例に術前尿失禁を認めた。下部尿路機能を尿流量測定と超音波検査による残尿量で評価した。QOL はキング健康質問票 (KHQ) と International Consultation on Incontinence Questionnaire-Short Form (ICIQ-SF) の 2 つの質問票を用いて評価した。いずれも尿失禁に特異的な質問票であり、QOL が低いほど高スコアとなる。術前に尿失禁を有さない群 (術前尿禁制群) と尿失禁を有する群 (術前尿失禁群) の 2 群間で、術後 12 か月までの尿失禁の改善率、下部尿路機能、QOL の比較を行った。術後 12 か月の時点で各群の尿禁制率は 83%、76%であった。特に、術後 3 か月と 6 か月の時点での尿禁制率の差は顕著であり、術前尿失禁群では術後の尿失禁がより遷延しやすいという結果となった。尿流量測定および残尿量については両群間で有意な差を認めなかった。QOL の比較において、KHQ による評価では 9 項目中 5 項目で術前尿失禁群の QOL が優位に低く、ICIQ-SF による評価でも同様に術前尿失禁群の QOL が低いという結果となった。以上の結果は、術前の 1 時間パッドテストによる尿失禁の評価が、術後の尿失禁の改善率や QOL の予測に有用であることを示唆している。</p>	

(International Urology and Nephrology, Jan 2020; 52(1): 67-76)

## 学位論文審査結果報告書

2020年7月29日

大学院医学研究科長 様

下記の通り学位論文の審査を終了したので報告いたします。

### 【審査結果要旨】

氏名：栗村嘉昌（泌尿器科学講座）

学位論文題名：The preoperative pad test as a predictor of urinary incontinence and quality of life after robot-assisted radical prostatectomy: prospective, observational, clinical study（術前パッドテストによるロボット支援前立腺全摘除術後の尿失禁と QOL の予測に関する臨床的前向き観察研究）

申請者らは、術前の尿失禁が、術後の下部尿路機能と QOL に及ぼす影響を解明するため、尿失禁を有さない群（術前尿禁制群）と尿失禁を有する群（術前尿失禁群）にわけて、術後 12 か月間の尿失禁改善率、下部尿路機能、QOL を評価した。術後 12 か月での尿禁制率は両群で差はなかったが、術後 3 および 6 か月で、術前尿失禁群の尿禁制率が低かった。また、質問票による QOL 評価は術前尿失禁群で低かった。以上より、術前尿失禁の評価が術後尿失禁の改善率や QOL の予測に有効であるとした。

2020年7月16日の審査会では、主査、副査より論文の目的、方法、結果、考察、結論について質問がなされ、また、下記の修正点があげられた。

- 前向き研究で仮説を検証したのか、観察研究の結果を解析したのか記載すること。
- p5,p25,p29 対象症例の説明を Fig1 に沿って説明する。failed to complete the 1h-pad test after surgery の症例数は本文中では 13 例の記載、Figure legends でも 13 例、Fig1 では 8 例と 5 例に分けられた記載。
- Fig1 で stop visiting は 4 例→5 例 に修正
- p19 Acknowledgments : 共著者への謝辞はのぞいたほうがよい。

申請者は、いずれの質問にも真摯かつ適切に回答し、本研究の意義を理解し説明できることを確認した。研究は十分なサンプル数で体系的に得られており、結果の解釈および結論も妥当である。また、術前尿失禁検査を用いて術後尿失禁を予測できるという研究結果は、新規性、有用性があることも確認された。以上より、修正点を学位論文に付記するこ

とを前提として、本論文は申請者の学位に相応しいと判断する。

論文審査委員 主査 島袋 充生  
副査 浄土 英一  
副査 塩 豊